

小学生の規範意識といじめ経験からみた 対人関係の社会学的考察

——他者評価の影響と高まる孤立指向——

作 田 誠一郎

〔抄 録〕

本稿は、規範意識といじめ経験を通じて小学生の対人関係および対人意識の特徴についてアンケート調査を用いて明らかにすることを目的としている。調査結果から対人関係の特徴としては、親しい人以外に対してあまり興味がなく孤立傾向も認められた。また実際の授業妨害等の違反の有無によって規範意識の違いをみたところ、友人関係に影響を受けていることが明らかになった。さらに友人や教師などの他者による評価がいじめ経験の影響や規範意識をみても重要な影響を与えていることが認められた。

キーワード：規範意識、いじめ経験、小学生、他者評価

1. 問題設定

近年、学校教育制度の改正を含めた変化をみても、学校社会は過渡期を迎えているようである。「アクティブ・ラーニング」や「カリキュラム・マネジメント」の導入などの教育課程の新たな試みとともに「チームとしての学校」や「教員の資質能力の向上」など、学校と地域の協同やネットワークの構築、さらに教員自身の意識改革を含めて社会に開かれた学校が求められている。さらに、道徳の教科化（2018年度から小学校、2019年度から中学校で実施予定）や改正学校教育法の成立に伴い2016年度より小中一貫教育を実施する「義務教育学校」が制度化され、市町村の判断による「4・3・2制」や「5・4制」など地域の状況に合わせた多様な区分も可能となるなど、従来の教育課程のあり方を転換する提言が次々に示されている。一方、児童生徒においては、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（2014）の施行からもわかるように家庭の貧困が世代間連鎖として問題視されている。また、いじめに関

しても「いじめ防止対策推進法」（2013）が施行され、学校や行政等の責務や対処が明示された。しかし、その後もいじめが原因とされる青森の中学2年生女子の自殺や横浜市で問題となった「震災いじめ」など、いじめに関する事件や問題は後を絶たない⁽¹⁾。

このような学校教育および学校制度の変革は、流動化し先行きがより不透明な現代社会において必要に迫られた結果ともいえる。またキャリア教育にみられるような、個々の社会的自立の基盤となるべき能力や態度は小学生から求められ、教師においては個に応じた指導や学習評価によって一層の個人の能力を高める姿勢へと転化する傾向にある。そのなかで、児童の対人意識や規範意識の特徴はますます注目される状況にある。

近年の学校社会における児童生徒の対人関係の研究成果として、学級内におけるヒエラルキーに着目した「スクールカースト」の研究があげられる。そのなかで「スクールカースト」の萌芽は小学生にあるものの、大多数の児童が一人の児童をいじめている構図（グループ間ではなく個人間の差）として捉えられていると指摘する研究もある（鈴木 2012）。この研究成果をみると、本考察で対象とする小学校高学年の対人関係および対人意識は、その後の中学校や高等学校の対人関係や対人意識に大きく影響することが窺い知れる。この中学校の「スクールカースト」の認識については、いじめ現象が影響を与えており、「スクールカースト」を意識している生徒は対人的な関係性に伴う気疲れなどのマイナス的な側面があらわれている結果もある（作田 2016）。

また土井（2010）は、少年犯罪に着目して脆弱化した仲間の紐帯を前提に空気を読んだ集団化（内実は脱集団化）や内部の人間関係の気遣い、そして教師を含めた世代間のフラット化など、今日の学校社会の対人意識の特徴を明らかにしている。これらの特徴も社会構造の変化や規範意識の揺らぎ、そして不確実な将来への不安など、大きな変動に晒された日本社会全体の縮図として読み取れる。

このような学校社会の現状を踏まえた上で、本論では学校社会における児童の対人関係に着目して分析を進めていきたい。具体的には、小学校高学年を対象にアンケート調査を実施し、小学生の規範意識といじめ行為を類型化することで児童の対人関係とその特徴について考察する。

2. 調査対象およびデータの概要

調査期間および対象としては、2014年12月から2015年1月の期間にX県内のY市立小学校6校において5年生および6年生を対象に調査票を配布して記入してもらう集合調査法を用いた。全体のサンプル数は556である。また男女比は、女性261(48.1%)、男性282(51.9%)であり、学年比は、5年生256(46.8%)、6年生291(53.2%)である。

本調査の中心は、小学生の対人関係および規範意識について考察することにある。したがっ

て、友人関係を含めた友人関係に個人主義的な傾向を掴むための項目を加えて 16 項目からなる質問項目を作成した。それぞれの項目においては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の 4 件法で回答を求めた。数量化 3 類型において使用した質問項目は、「A1 一人で好きなことをやっている方が好き」「A2 人と付き合う時どう見られているか気になって疲れる」「A4 たいていのことなら他の人と同じくらいできる」「A5 いつも自分の行動を振り返りよくしようと思う」「A6 親しい人たち以外の人の考え方や行動に興味がない」「A7 人から認められないと不安」「A8 将来のために今の生活をがまんする」「A9 ウケるようなことをよくする」「A10 安心して話せる友だちがいない」「A12 一人ではいるとたまらなく寂しくなる」「A13 友だちからの返信がないと不安」「A14 友だちからの上から目線はむかつく」「A15 友だちづきあいのなかで『場の空気が読める』ことは重要だ」「A17 友だちに心を打ち明けている」「A21 友だちと遊んでいるとき、自分だけが浮いていないか不安」「A22 学校生活で孤独を感じている」, である⁽²⁾。

また規範意識に関して「あなたは、小学生 (5・6 年生) が次のことをするのをどう思いますか」という質問を用意し、「決してしてはいけない」「しないほうがよい」「少しならしてもかまわない」「やってもよい」の 4 件法によって得られた回答を使用している。規範意識を問うために使用した質問項目は、「45.1 先生から言われたことを無視する」「45.2 校則などの学校のルール違反 (遅刻や早引きを含む)」「45.3 いじめる行為」「45.4 お酒を飲む・たばこを吸う」「45.5 学校のものをわざとこわす」「45.6 まかされた係や委員や日直・当番などの仕事をさぼる」「45.7 人をなぐったり、けったりする (暴力行為)」「45.8 友だちだけでゲームセンターに行く」「45.9 口紅・マニキュアなどの化粧や髪をそめる」「45.10 まちで落書きをする」「45.11 授業中におしゃべりやさわいだりする」「45.12 友だちを仲間はずれにする」「45.13 性的行為をする」「45.14 万引きをする」「45.15 他人にお金をせびる (たかり行為)」「45.16 ゴミをろう下や床、道路に捨てる」「45.17 薬物 (シンナーや危険ドラッグなど) を使用する」, である。

3. 分析結果

(1) 全体的な対人傾向

はじめに数量化Ⅲ類において友人関係の全体的な傾向を掴むために得点平均の比較をおこないたい。各軸の固有値、寄与率、累積寄与率、相関係数は表 1 に示した。

表 1 各軸の固有値、寄与率、累積寄与率、相関係数

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第 1 軸	0.2301	14.66%	14.66%	0.4797
第 2 軸	0.1590	10.13%	24.79%	0.3987
第 3 軸	0.1338	8.53%	33.32%	0.3659
第 4 軸	0.1304	8.31%	41.63%	0.3611

図1から図4までの各軸の説明について、第1軸は、学校生活で孤独を感じていたり、安心して話しができる友だちがいなどが高い値となっており、対照的に友だちに心を打ち明けているがマイナスの数値を示していることから「孤立指向の軸」とした。第2軸は、親しい人たち以外の人に興味が無いが、一人でいることが好きは高い数値を示している。しかし、友人関係における寂しさやリアクションなどは低い値となっていることから「付き合い指向の軸」とした。

第3軸は、親しい人たち以外に興味が無い第2軸と同様であるが、一人でいるとたまらなく寂しいや友だちに心を打ち明けているなども高い数値としてあらわれている。他方で、安心して話せる友だちはいないは最も低い値となっていることから、近しい友人に気を遣うような親密な傾向として「親密重視傾向の軸」とした。最後に第4軸であるが、友だちからの返信がないと不安が突出して高い数値を示していることから「リアクション重視指向」とした。

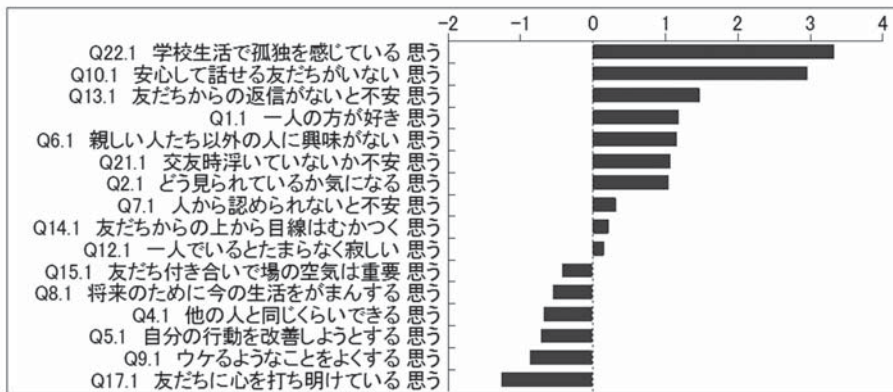


図1 孤立指向の軸（第1軸）

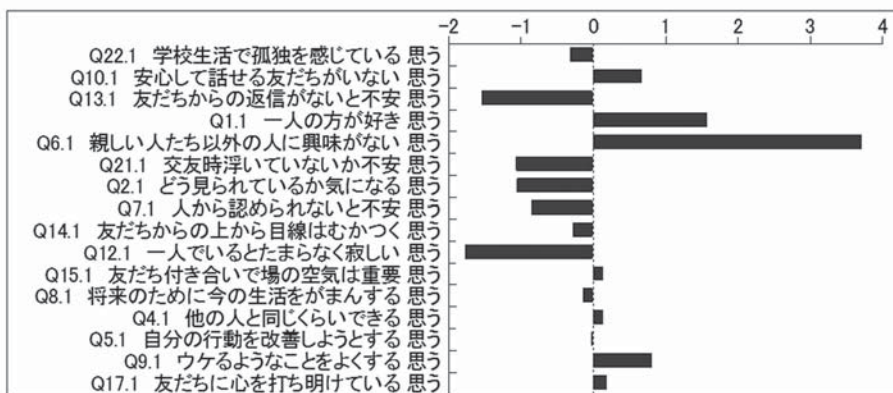


図2 付き合い傾向の軸（第2軸）

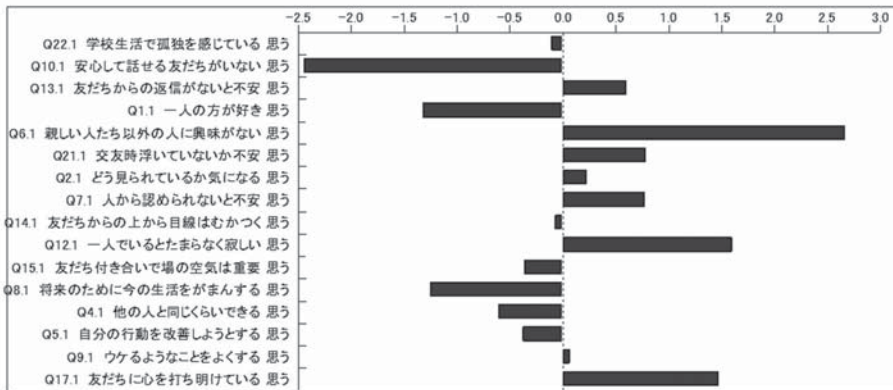


図 3 親密重視傾向の軸 (第 3 軸)

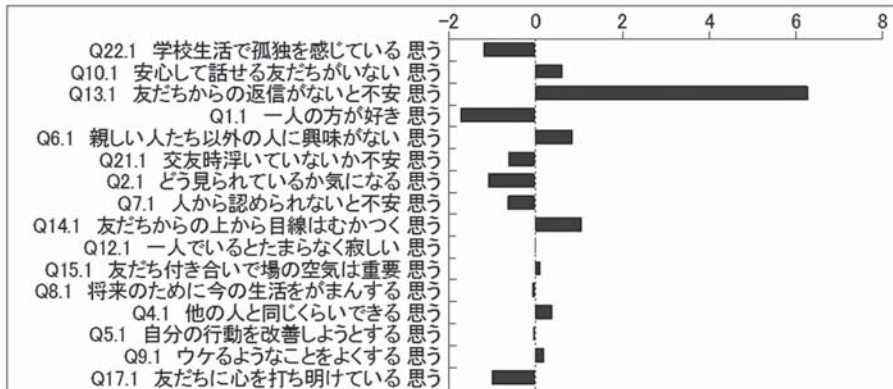


図 4 リアクション重視指向の軸 (第 4 軸)

各属性および授業妨害、いじめ等の有無のサンプル得点平均は図 5 のとおりである。

図 5 は各軸のサンプル得点の平均を属性および規範行為別にあらわしたものである。この図 5 から性別においては、第 2 軸が男性にプラスの数値としてあらわれる一方、第 3 軸はマイナスの数値としてあらわれている。つまり、一般的な付き合い傾向は男性が高い数値を示しているが、女子は親密的な対人関係を重視する第 3 軸が高くあらわれていることがわかる。また授業妨害およびいじめた経験がある者は、第 2 軸およびリアクションを重視する第 4 軸が高くあらわれていることも注目値する。さらに、「最近、クラスやクラブ等でいじめたことがある」に関しては、第 2 軸および第 4 軸が「いじめたことがない」とくらべても高い傾向にあり、加えてネット上におけるいじめともいえる「ネット上(ツイッターやラインなど)で、友だちの悪口を書き込んだことがある」との回答においては、第 2 軸および第 4 軸に加えて第 1 軸が高い値を示している。この特徴をみると全体的な対人傾向では、いじめている児童

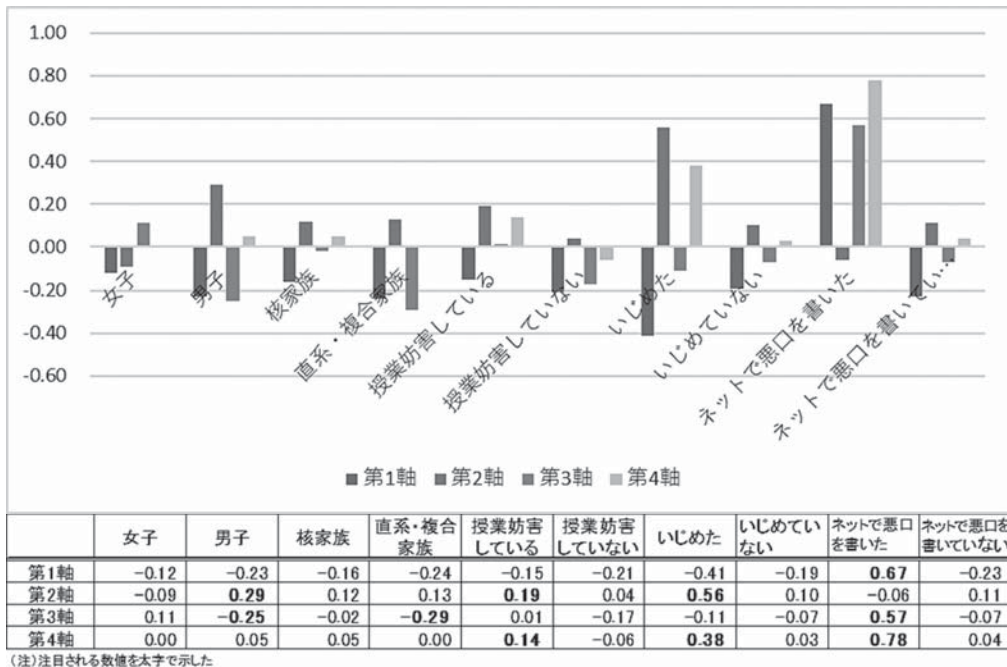


図5 属性別におけるサンプル得点平均

は深い付き合いよりも、ある意味ドライな付き合いとともに周囲のリアクションを重視している傾向が読み取れる。またネット上において第1軸は、孤立的な傾向が学校内における対面的ないじめとは異なる点として注目される。

(2) 規範意識と対人関係

次に、規範意識の質問項目を中心に性別および実際の学校社会における禁止行為の有無からその特徴をみてみたい。表2は、先に示した規範意識を問う設問を用いてそれぞれ性別、授業妨害の有無（「授業中に私語をしたり、さわいだりすることがある」）、友だちを介した学校の禁止事項の有無（「学校が禁止していることも、友だちがやっていればやってしまう」）、いじめた経験の有無（「これまでにいじめた経験がある」）のそれぞれの平均値と一元配置分析の結果を示したものである⁽³⁾。

表2をみてもわかるように、性別においては「化粧・染髪」において男子よりも女子の方が、許容する傾向が高いことが数値にあらわれている。また授業妨害の有無においては、「授業妨害」とともに「ゲームセンターへの出入り」や「化粧・染髪」が「授業妨害あり」と答えた児童に数値として高くあらわれている。この傾向は、「いじめた経験の有無」においても同様にあられる結果となった。さらに、友人を介した学校の禁止事項の有無では、「先生からの指導無視」や「校則違反」を含めて多くの規範意識に影響を与えている結果が得られた。友

表 2 性別および禁止行為にみた規範意識の特徴

	女性	男性	F 値	授業妨害 している	授業妨害 していない	F 値	禁止事項 する	禁止事項 しない	F 値	いじめた 経験あり	いじめた 経験なし	F 値
先生からの指導無視	1.46	1.49	0.23	1.58	1.37	14.95 ***	1.75	1.39	34.21 ***	1.67	1.44	10.45 **
校則違反 (遅刻を含む)	1.56	1.50	1.31	1.61	1.45	9.27 **	1.78	1.45	29.03 ***	1.65	1.51	3.89 *
いじめ行為	1.13	1.21	3.67	1.23	1.12	6.68 **	1.30	1.13	13.26 ***	1.40	1.13	24.42 ***
飲酒・喫煙	1.06	1.15	6.99 ***	1.15	1.05	7.81 **	1.23	1.07	17.15 ***	1.14	1.09	1.20
器物損壊	1.11	1.13	0.65	1.16	1.08	6.73 **	1.29	1.07	38.48 ***	1.16	1.11	1.44
係や当番のさぼり	1.43	1.44	0.07	1.53	1.34	15.30 ***	1.66	1.36	27.11 ***	1.56	1.41	4.86 *
暴力行為	1.18	1.21	0.54	1.29	1.12	18.31 ***	1.41	1.15	30.87 ***	1.36	1.18	10.31 **
友だちだけでゲームセンター	1.75	1.64	2.37	1.86	1.50	26.57 ***	2.17	1.54	61.13 ***	1.93	1.64	8.64 **
化粧や染髪	1.70	1.45	13.38 ***	1.65	1.48	6.57 **	1.80	1.51	13.22 ***	1.73	1.53	4.90 *
街中で落書きをする	1.18	1.20	0.32	1.26	1.12	13.85 ***	1.36	1.15	20.38 ***	1.34	1.17	10.92 **
授業妨害	1.73	1.79	0.99	1.97	1.55	48.31 ***	2.10	1.66	37.30 ***	1.95	1.73	6.30 *
仲間はずれにする	1.20	1.27	3.26	1.31	1.15	15.46 ***	1.42	1.18	24.50 ***	1.35	1.22	6.10 *
未成年の性的行為	1.19	1.17	0.30	1.22	1.14	4.44 *	1.27	1.15	7.30 **	1.21	1.17	0.44
万引き	1.02	1.07	3.96 *	1.06	1.03	1.66	1.09	1.04	2.99	1.10	1.04	3.68
たかり行為	1.07	1.09	0.59	1.13	1.05	9.65 **	1.20	1.06	17.01 ***	1.20	1.07	10.62 **
ゴミ捨て	1.28	1.33	1.01	1.39	1.21	15.62 ***	1.50	1.24	24.60 ***	1.43	1.27	5.76 *
薬物使用	1.03	1.04	0.71	1.05	1.02	1.98	1.08	1.02	5.79 *	1.07	1.03	1.91

*p.05,**p < .01,***p < .001

人を介することにより規範意識が影響することは、友人関係に注意を払う今日の児童の特徴ともいえるかもしれない。

図 6 は、「授業中に私語をしたり、さわいだりすることがある」という設問と「学校のきまりを守らない子どもにはもっと厳しくすべきだ」という設問をクロス集計した結果を「校内における規範意識の 4 類型」(以後、「規範類型」と略す)としてカテゴリー化したものである。図 6 に示したとおり、この規範類型はそれぞれ「自認型」(22.6%)、「責任回避型」(24.0%)、「許容型」(24.0%)、「厳正型」(24.0%)と名付けた。各類型について、「自認型」は校則に厳しくすべきと思いながら自ら校則違反をしている矛盾した状態であるといえる。また「厳正型」は、実際に授業妨害もせずに校則も厳しくすべきと意識しているタイプといえる。「許容型」は、実際に授業妨害はしていないが、校則違反に対しては許容するタイプである。最後に「責任回避型」であるが、校則違反に対して許容しつつ、実際に授業妨害をしているタイプであり、「自認型」とくらべて矛盾していない状態といえる。

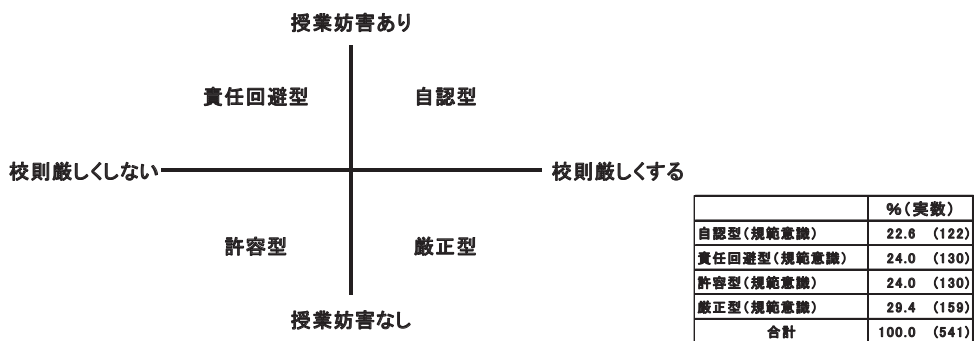


図 6 校内における規範意識の 4 類型 (規範類型)

この規範類型を用いて、他の項目とクロス集計することによってその特徴をみてみたい⁽⁴⁾。
図7は、表2において用いた友人を介した学校の禁止事項に対して規範類型からみたものである。

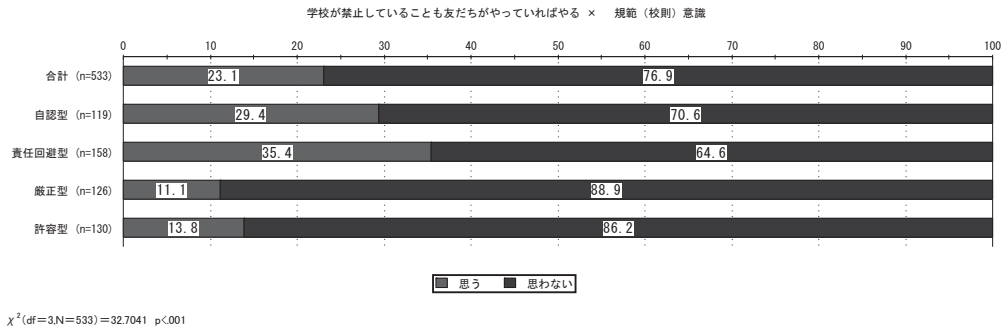


図7 友人関係にみる学校禁止事項と規範意識

この結果をみると、「責任回避型」（35.4%）が最も高く、続いて「自認型」（29.4%）となった。そして、この両類型にくらべて、「厳正型」（11.1%）や「許容型」（13.8%）が目立って低い値を示す結果となった。この差は、実際に違反行為をおこなっている違いとも捉えられる。つまり、「責任回避型」および「自認型」の約3割が意識の上で学校の禁止行為に対して友人関係に影響を受けているということがわかる。この結果をみても、友人関係を含めた対人意識と規範意識には何らかの関連がありそうである。そこで、次にこの規範類型を用いて他者からの影響（評価）との関連についてみてみたい。

図8は、他者評価（「勉強やクラブ活動などに対する努力をまわりの人にきちんと評価してもらいたい」）を規範類型でみたものである。

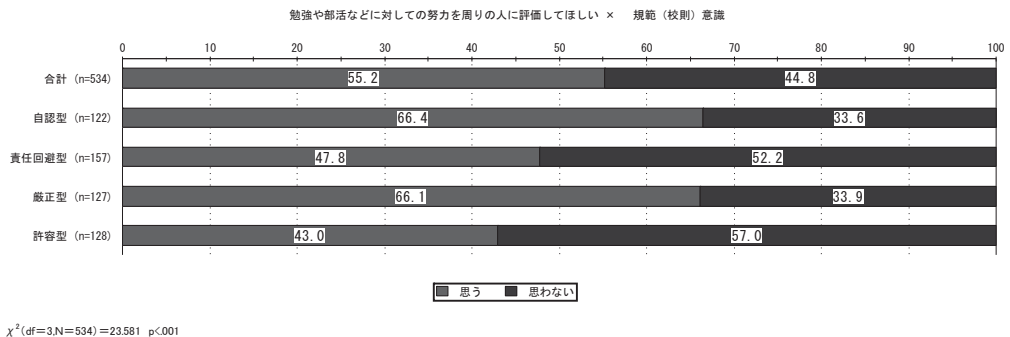


図8 他者評価と規範意識

図8からわかるように、「自認型」は66.4%と最も高い値を示している。また同様に「厳正型」も66.1%と7割近くが他者からの評価を求めている。それに対して、「責任回避型」（47.8%）

および最も低い値である「許容型」(43.0%)は、共通する点として規範意識(校則)が低い傾向があげられる。他者から評価されたいという他者評価が規範意識の「自認型」にも認められることから、自らの行為が悪いと自覚している点と他者評価に何らの関連がありそうである。

他者評価において友人とともに重要な他者となる存在として教師があげられる。この教師との関係についてみてみたい。図 9 は、規範類型を用いて教師との関係をみたものである。「責任回避型」をみると、他の類型とくらべて「先生の顔色や指導が気になる、こわい」という回答が 12.6%と高い値を示しており、同様に「授業以外では話したくない、あいたくない」という回答も 16.6%と高い値を示す結果となった。「厳正型」とくらべると規範意識と指導にあたる教師との関係も意識の上で関連がありそうである。

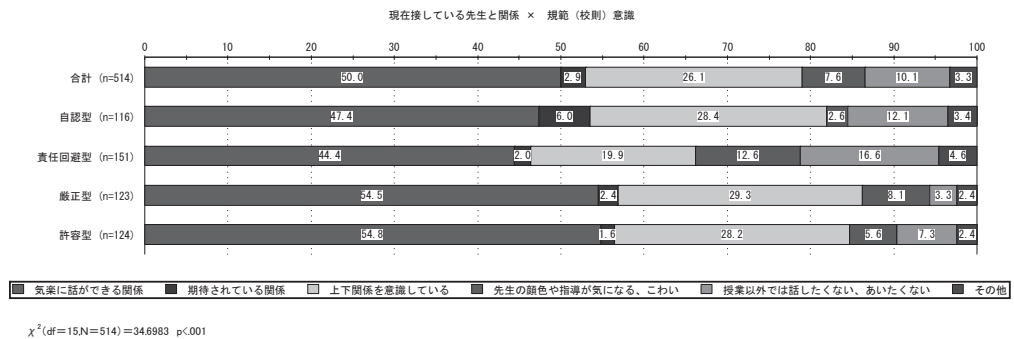


図 9 対教師関係と規範意識

規範類型の分析の最後に、本論の分析対象でもあるいじめ現象について、いじめた経験からその特徴を分析したい。図 10 は、規範類型を用いて「これまでにいじめた経験がある」という質問項目をみたものである。

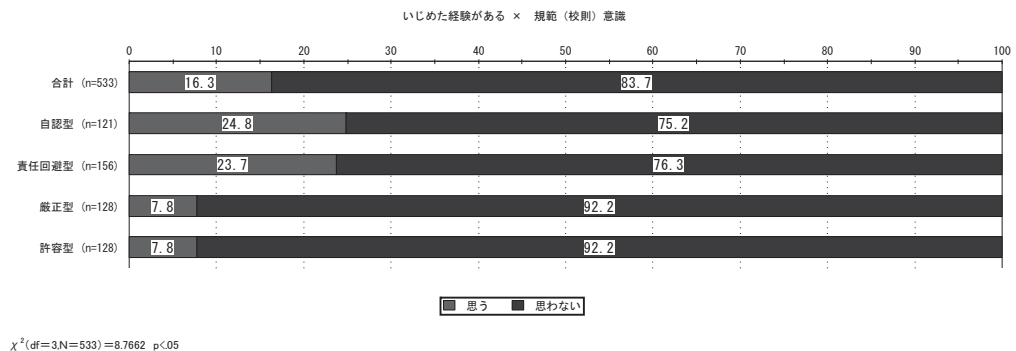


図 10 いじめた経験と規範意識

この図から、「自認型」が24.8%、「責任回避型」が23.7%と「厳正型」（7.8%）および「許容型」（7.8%）の両類型にくらべて高い値を示す結果となった。学校生活における規律違反といじめ経験との関連もこの図から読み取れる。次にこのいじめ経験を用いて児童の対人意識についてさらなる分析を進めたい。

（3）いじめ経験の特徴と対人意識

ここからは先ほど用いたいじめた経験を含めて対人意識と規範意識の特徴について考察する。いじめ経験については、「これまでにいじめられた経験がある」および先ほど用いた「これまでにいじめた経験がある」の設問をクロス集計して4つのカテゴリーに分類した。このいじめ経験の4類型は、表3の通りである（以後、「いじめ経験類型」と略す）。

表3からわかるように、最も多かったのは「両経験なし」が63.9%であり、最も少ない数値は「いじめた経験」の6.1%であった。同表をみると、全体の約4割が「いじめられた経験」や「いじめた経験」といういじめ経験を有する結果となった。

次に表4は、いじめ経験類型を用いてどのような行為がいじめであるのかという設問に対して複数回答で得られた結果である。

表3 いじめ経験の4類型

	%（実数）
両経験あり	10.6（57）
いじめた経験	6.1（33）
いじめられた経験	19.4（105）
両経験なし	63.9（345）
合計	100.0（540）

表4 いじめ経験といじめ行為

4 類型	合計	集団でなぐる、ける	プロレス技をかける	はだかにする	万引きをさせる	人のものをかくす	人のものを壊す
合計	100（540）	73.2（388）	30.2（160）	44.2（234）	47.7（253）	56.0（297）	54.5（289）
両経験あり	100（57）	75.4（43）	38.6（22）	47.4（27）	49.1（28）	63.2（36）	64.9（37）
いじめた経験	100（33）	66.7（22）	27.3（9）	39.4（13）	45.5（15）	54.5（18）	45.5 （15）
いじめられた経験	100（105）	74.3（78）	34.3（36）	43.8（46）	49.5（52）	56.2（59）	53.3（56）
両経験なし	100（345）	71.0（245）	27.0（93）	42.9（148）	45.8（158）	53.3（184）	52.5（181）
		嫌なあだ名を付ける	悪口を言う	嫌な仕事を押し付ける	ネット上でデマを流す	無視（シカト）する	その他
		54.5（289）	74.9（397）	50.9（270）	44.3（235）	65.8（349）	2.8（15）
		64.9 （37）	82.5（47）	59.6（34）	47.4（27）	71.9（41）	1.8（1）
		48.5（16）	60.6 （20）	39.4 （13）	45.5（15）	69.7（23）	3.0（1）
		66.7 （70）	81.0（85）	51.4（54）	41.0（43）	68.6（72）	7.6（8）
		48.1（166）	71.0（245）	49.0（169）	43.5（150）	61.7（213）	1.4（5）

（注）カッコ内は実数、特徴のある数値は太字で示した。

表4の結果から、全体的な特徴として「悪口を言う」（74.9%）が最も高く、続いて「集団でなぐる、ける」（73.2%）となった。その後は、「無視（シカト）する」（65.8%）と続いている。小学生のいじめ行為として直接的な暴力行為よりも「悪口を言う」が多いことは、特徴として注目される。さらにこの「悪口を言う」をいじめ経験類型でみると、「いじめた経験」（60.6%）は他の3類型とくらべて最も低い値を示している。この傾向は「人のものを隠す」（45.5%）や「嫌な仕事を押し付ける」（39.4%）でも同様の特徴としてあげられる。一方、「い

じめられた経験」をみると「嫌なあだ名を付ける」が 66.7%と「両経験あり」(64.9%)と同様に高い値となった。同表からみても、「いじめられた経験」および「いじめた経験」によって、いじめ行為のイメージが異なることが読み取れる⁽⁵⁾。

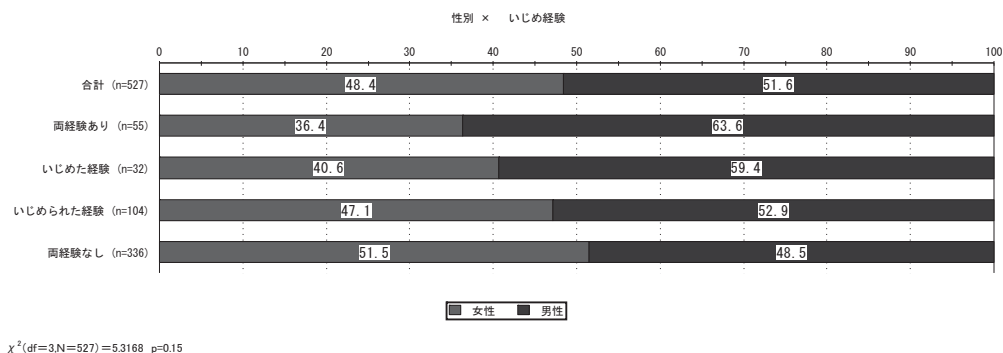


図 11 いじめ経験と性別

図 11 は、いじめ経験類型と性別をみたものである。この結果から、男子の方が女子にくらべて「両経験あり」(63.6%)および「いじめた経験」(59.4%)について約 6 割を占めており、「いじめられた経験」および「両経験なし」は、男女差に大きな開きはないことがわかる。

次に、いじめ経験における対人意識について、「人とつきあうとき、自分がどう見られているのかが気になって疲れる」という設問といじめ経験をみたものが図 12 である。

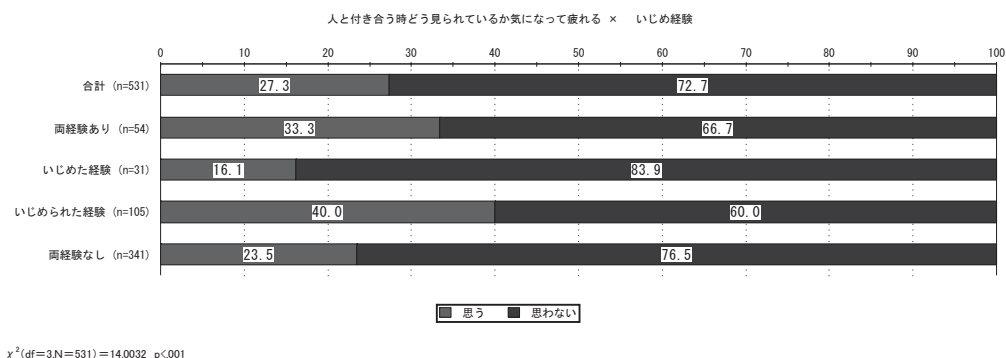


図 12 いじめ経験と人づきあいの疲れ

この図からわかるように「いじめられた経験」が 40.0%と最も高く、続いて「両経験あり」が 33.3%であることから、他の類型とくらべて「いじめられた経験」が人づきあいの疲れとしてあらわれていることがわかる。

次に、対人意識における能力主義的傾向をみてみたい。この項目は、現代の対人意識にお

いて他者評価に通底すると思われる能力主義を知るために「能力がない人は、よい生活ができなくて当然だ」という設問から得られた回答といじめ経験を図 13 として示したものである。

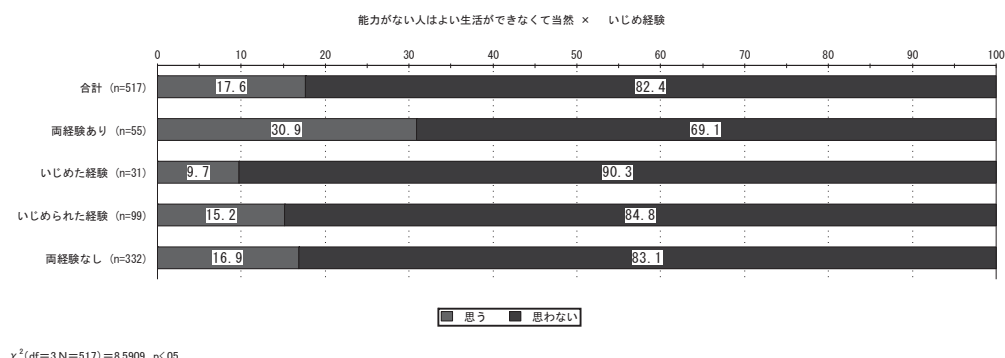


図 13 いじめ経験と能力主義

図 13 の結果から、「両経験あり」が 30.9% と他の類別にくらべて高い値を示していることがわかる。「いじめた経験」(9.7%) および「いじめられた経験」(16.2%) とは異なり、いじめについて両経験を有していることが能力主義的傾向として高くあらわれている。この結果は、いじめという力を他者に向け、逆に他者から受けてきた帰結として能力主義的な傾向が高まったとも考えられ、現代のいじめ現象のひとつの特徴としても注目される。

さらに、対人意識に関わる項目のなかで、「ウケるようなことをよくする」の設問を用意したところ図 14 の結果が得られた。

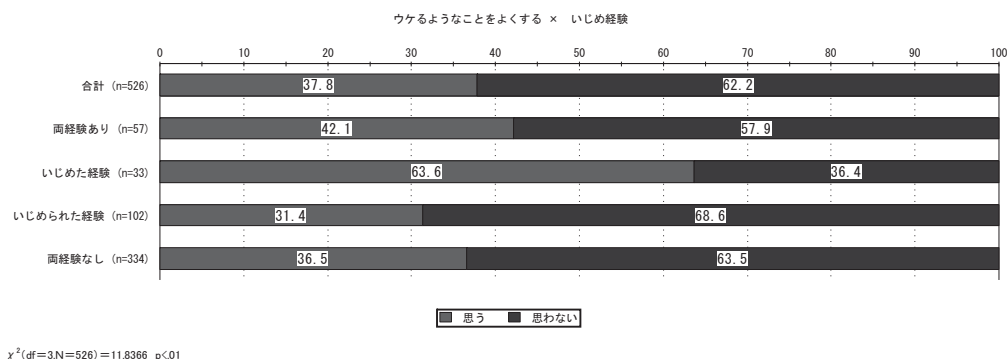
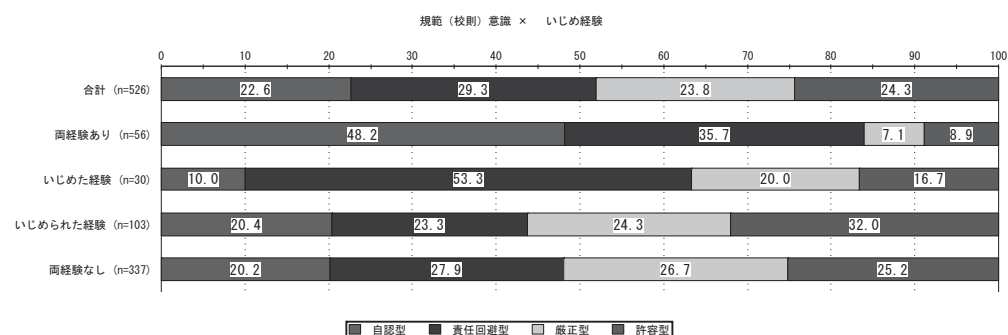


図 14 いじめ経験と「ウケ」狙い

この結果から、「いじめた経験」が 63.6% と他の類型よりも高い値であることがわかる。先行研究をみると森田と清水（森田・清水 1986 = 1994）の「いじめ集団の四層構造モデル」において「観衆」（直接にいじめに手を下さずにはやし立てることでいじめっ子を是認する）

の存在が指摘されたが、いじめ加害者において周囲の「ウケ」を気にする傾向がこの「いじめた経験」の高い値としてあらわれているともいえよう。

最後に本論の課題でもある規範意識についていじめ経験との関連を考察してみたい。図 15 は、いじめ経験における規範類型をみたものである。



$\chi^2(df=3, N=526) = 44.3771 \quad p < 0.01$

図 15 いじめ経験類型と規範類型

図 15 から「両経験あり」のなかで「自認型」が 48.2%と半数近くを占めていることがわかる。これに対して、「いじめた経験」では「責任回避型」が 53.3%と過半数を占めている。「いじめられた経験」では「許容型」が 32.0%となり、他のいじめ経験とくらべて最も高い値を示す結果となった。この結果とみると、「両経験あり」において「自認型」が「いじめた経験」の「自認型」(10.0%)とくらべて高い比率を占めていることから、過去の「いじめた経験」とともに「いじめられた経験」をもつ「両経験あり」がこの矛盾した意識を持つ「自認型」の数値にもあらわれてことが窺い知れる。一方で、「いじめられた経験」において「許容型」が最も高い値の結果となったことは、いじめられるという経験が違反行為に対しても受容してしまうことにも関連がありそうである。

4. まとめ

本考察において、小学生の規範意識およびいじめ経験を中心に対人意識や対人関係についてみてきた。対人関係の特徴としては、孤立を求める傾向や親しい人以外に興味がないなど、親密な関係を身近に求めている傾向が認められた。規範意識については、属性および違反行為において全体的に違法行為に対しては高い値は認められなかったが、実際に授業妨害をしたり、「いじめた経験」を有している児童は、授業妨害やいじめた経験がない児童にくらべて「友だちだけのゲームセンターの出入り」や「化粧・染髪」など、学校外のプライベートに近い場面における規範意識に違いが認められた。また、友人を介した禁止事項に関わる意識の有

無においては、学校外とともに学校内の規範意識についても違いが認められた。このような友人関係を強く意識する傾向と規範意識の関係は、規範類型における「自認型」や「責任回避型」という実際に違反行為をおこなっている児童において高い値としてあらわれたことから関連があると思われる。一方、友人や教師などの他者からの評価についても、規範意識が高い「自認型」や「厳正型」に高い値があらわれていることから、規範意識に対して他者の評価は重要な影響を与えていることがわかった。さらに、いじめ経験の影響の分析結果から、「いじめられた経験」が人づきあいの疲れにつながっており、いじめの両経験が能力主義的な傾向を高め、そして「いじめた経験」が周囲の「ウケ」を意識する傾向と関連することが明らかになった。

近年、日本の近代化に対して「半圧縮近代」とする新たな見解が注目される（落合 2013）。親密性と公共圏の再編成を主題として、西ヨーロッパや北米とは異なり急速に「第二の近代」（第二次人口転換を背景とした「個人化」と「親密性の変容」）に進展する現代アジアの社会変動を「圧縮された近代」として議論している。特に日本の近代化は、他のアジア諸国とくらべて「第一の近代」（大衆近代家族）を短期間に経験した「半圧縮近代」として指摘している点は、家族をベースに得られた知見ではあるが、今日の学校社会に考察するうえで傾聴に値する。この「半圧縮近代」を念頭に置いた本田（2014）は、「戦後日本型循環モデル」（仕事・家族・教育の発展が一致して形成された）の破綻を 90 年以降の労働条件の変化（雇用形態や労働条件の多様化と格差化）や家族の形成（晩婚化・非婚化・少子化）にみている。特に本論に通じる教育においては、教育資源の格差を取りあげ「戦後日本型循環モデル」を超えた社会像を提示している。そのなかで、「学校が地域の拠点として、児童生徒のみならずその背後の家庭が抱える困難を鋭く見出し、様々な社会サービスにつなげていく役割を強化していくこと」（本田 2014:46）や「違法な働き方や不合理で非効率的な仕事の進め方に対してきちんと〈抵抗〉し、是正できるための知識やスキルを若者に身につけさせる責任を、教育機関は担う」（同書 47）といった今後の教育機関のあり方が問われることを指摘している。

本論では、親しい人以外にあまり興味関心がない孤立指向が認められ、さらに規範類型における友人の違反行為に同調する傾向やいじめ経験類型におけるいじめ経験者の能力主義的傾向、「ウケ」狙いの傾向など、社会規範やいじめ現象にも「個人化」や「再帰性」とも読み取れるような「第二の近代」に共通する傾向が認められた。今後、ますますグローバル化が進展し、従来の「戦後の日本型循環モデル」が新たなモデルに移行せざるを得ないなかで、学校社会の変化が児童生徒にどのような影響をもたらすのかを注視していく必要がある。

〔注〕

- (1) 「震災いじめ」に関しては、2017 年 2 月 7 日の「いじめ防止対策協議会」において国の基本方針に「東日本大震災で被災した児童生徒に対するいじめの未然防止・早期発見に取り組む」を改定案と

して盛り込むことで別添資料に加えられることで了承された。

- (2) 数量化三類では、「思う」のみ(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を統合)を用いている。
- (3) 「思う」「そう思う」「どちらかといえばそう思う」,「思わない」「どちらかといえばそう思わない」「思わない」にそれぞれ統合して分析に用いた。
- (4) 規範類型およびいじめ類型の各クロス集計に関しては、質問項目を「思う」「そう思う」「どちらかといえばそう思う」,「思わない」「どちらかといえばそう思わない」「思わない」にそれぞれ統合して分析に用いた。
- (5) いじめ行為(11 項目)の設問に対して因子分析(最尤法)を実施したところ、4 回の反転で解が収束し、固有値 1 以上の軸が 2 つ抽出された。第 1 因子は「暴力的ないじめ」、第 2 因子は「精神的ないじめ」を表したものと解釈できる(表 5)。

表 5 いじめ行為(因子分析)

	第 1 因子	第 2 因子
	暴力的ないじめ	精神的ないじめ
裸にする	0.860	0.230
万引きをさせる	0.820	0.245
ネット上でデマを流す	0.698	0.379
プロレス技をかける	0.564	0.271
人のものを壊す	0.506	0.503
集団でなぐる、ける	0.481	0.313
人のものを隠す	0.335	0.597
悪口を言う	0.089	0.571
無視する(シカトする)	0.292	0.521
嫌な仕事を押し付ける	0.473	0.506
嫌なあだ名をつける	0.239	0.460
固有値	5.161	1.135

バリマックス回転後の因子負荷量を記載

[引用・参考文献]

- Bauman, Zygmunt., 2000 "Liquid Modernity" Plity Press. (= 森田典正訳, 2001, 『リキッド・モダニティ—液状化する社会』 大月書店).
- Beck, Ulrich, Giddens, Anthony. Lash, Scott. 1994 "Reflexive Modernization-Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order-" Plity Press. (= 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳, 1997, 『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』 而立書房).
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』 筑摩書房.
- Furlong, Andy. and Cartmel, Ferd. 1997 "Young People and Social Change" Open University Press. (= 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸井妙子訳, 2009, 『若者と社会変容—リスク社会を生きる』 大月書店).
- 本田由紀, 2011, 『学校の「空気」』 岩波書店.
- 本田由紀, 2014, 『社会を結びなおす—教育・仕事・家族の連携へ』 岩波書店.
- 森田洋司・清永賢二, 1994, 『いじめ—教室の病い(新訂版)』 金子書房.
- 内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』 柏書房.
- 内藤朝雄, 2009, 『いじめの構造—なぜ人が怪物になるのか』 講談社.
- 落合恵美子編, 2013, 『親密圏と公共圏の再編成—アジア近代からの問い』 京都大学学術出版.
- 岡田努, 1995, 「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」『教育心理学研究』 第 5 号, pp.43-55.
- 作田誠一郎, 2016, 「『スクールカースト』における中学生の対人関係といじめ現象」『佛大社会学』 第 40 号, pp.43-54.
- 鈴木翔, 2012, 『教室内カースト』 光文社.
- 竹川郁雄, 2006, 『いじめ現象の再検討—日常社会規範と集団の視点』 法律文化社.
- 滝充, 1992, 「“いじめ”行為の発生・推移状況に関する実証的研究—“いじめ”行為の恒常化と加害・被害経験の一般化」『教育学研究』 第 59 巻第 1 号, pp.113-123.

小学生の規範意識といじめ経験からみた対人関係の社会的考察（作田誠一郎）

（さくた せいいちろう 現代社会学科）

2017年3月13日受理